



2009年6月10日放送

漢方頻用処方解説「八味地黄丸」①

北里大学東洋医学総合研究所 漢方診療部 副部長 早崎 知幸

<主な効能>

八味地黄丸は、漢方でいう腎虚に用いる代表的な処方です。そこで、主な効能は、この腎虚をベースにして起こる症状を考えればよいということになります。

最古の中国医学書である『黄帝内経素問』には、人体の成長・老化を「腎」の機能の消長と関連づけています。すなわち、「腎」には生命エネルギーともいべき「精」一米偏に青と書く精一が蓄えられているとされています。これが老化によって不足した状態が「腎虚」と呼ばれるものです。

病理学的には、腎臓の働きが落ちたというだけではなく、加齢に伴って起こる副腎・泌尿・生殖器系を中心とした機能の低下ともいえます。その結果として症状は、下半身の脱力感・痛み・しびれ・全身倦怠感、陰萎、排尿異常、腰痛、手足の冷えやほてり、などが起こります。このような症状を目標にして、前立腺肥大、糖尿病、坐骨神経痛、腰痛、腎疾患、陰萎、膀胱炎、高血圧、脳卒中後遺症、老人性白内障、老人性皮膚掻痒症などに応用されます。

このように、加齢に伴って起こる様々な症状の改善や、症状進行の抑制のために使用されます。

<処方出典、由来>

八味地黄丸の出典は『金匱要略』です。

『金匱要略』には、「八味地黄丸」という名称は用いられておらず、「崔氏八味丸」、「八味腎気丸」、「腎気丸」の3種類の名前で処方構成の指示が記されています。(ちなみに、「崔氏八味丸」は11世紀半ば、宋の文官林億らが『金匱要略』を校訂出版する際、他の医書から佚分(いつぶん)を拾って後から補ったものと考えられます。)

条文ですが、中風歴節病篇には、「崔氏八味丸は、脚気上って小腹に入り、不仁するを治す。」と記載されています。下肢のしびれや麻痺が下腹部にまで広がったものを治すという意味です。血痺虚劳病篇には、「虚劳、腰痛、小腹拘急し、小便利せざる者は、八味腎気丸之を主る。」と記載されています。痰飲欬嗽病篇には、「夫れ短気微飲あるは、当に小便より之を去るべし、苓桂朮甘湯之を主る。腎気丸もまた之を主る。」と記載されています。短気とは息切れのことで、呼吸器疾患に応用できることを示唆しています。消渴小便利淋病篇には、「男子消渴、小便反って多く飲むこと一斗をもって小便一斗なるは腎気丸之を主る。」と記載されています。消渴とはのどの渇きが異常に強く、多飲多尿の状態になることで、糖尿病に応用される根拠となっている条文です。婦人雑病篇には、「問ふて曰く、婦人の病、飲食故の如く、煩熱臥することを得ず、而して反って倚息するものは何ぞや。師曰く、此れ転胎と名づく。溺するを得ざるなり。胞系了房するを以ての故に此の病を致す。但小便利すれば即ち癒ゆ。腎気丸之を主る宣し。」とあり、婦人の尿の出ない状態に八味地黄丸が適応することを述べています。

処方名の由来ですが、「八味」とはこの処方が、八味の生薬で構成されているからです。

「腎気」とは腎の臓の正気のことです。腎は五臓の一つで、五行説では水に配当され、生理機能としては「精」を蔵するとされています。この場合の「精」とは主として生命エネルギーであり生殖能力のことも含みます。泌尿器系とも密接な関係にあるので、古典でも泌尿器疾患に用いられますが、本来の「腎気丸」の意味するところは腎の蔵する精気を補うことにあります。そのため老化予防薬としても用いられるのです。その補腎、つまり精力増強の主薬は黒い色の地黄です。黒は五行でいう水、つまり腎の色です。後世「八味地黄丸」の名称で通用するようになったのはそのためです。

その名の示すように、本来は丸薬で服用するものです。しかし現在は、八地黄味丸料として、湯液の形で使われることも多くなっています。これは、構成生薬の附子が毒性を持っているために、加熱によって毒性の減弱を計るということも理由の一つにあるようです。

<生薬構成の漢方的解説>

先程もお話しましたが、この処方は八味の生薬、すなわち地黄、山茱萸、山薬、沢瀉、茯苓、牡丹皮、桂枝、附子、で構成されていて、中心の生薬は地黄です。

地黄は『神農本草経』の上品に収載され、古来、補血、強壯の薬として用いられてきました。他に止血作用や解熱作用もあり、一般には虚弱者の貧血症にしばしば用いられます。味は甘く、性質は寒、つまり体を冷やす働きがあるとされます。山茱萸はリンゴ酸などが主成分で、利尿作用があります。味は産なのですっぱく、微温なのでわずかに身体を温め、滋養、強壯、収斂作用があります。(しばしば地黄や山薬と一緒に使用されます。)山薬は薯蕷ともいい、ヤマイモのことで、味は甘く、寒熱は平です。(『本草綱目』には、「腎気を益し、脾胃を健やかにし、下痢を止め、云々」などと記載されていて、)胃腸虚弱や食欲不振、身体疲労などに使用されます。沢瀉の味は甘く、寒、つまり身体を冷やし、利尿作用があるので、身体の中の水分の偏在、代謝異常を治します。(『薬徴』では、水毒による頭重感やめまいに用いていた記載があります。)茯苓はサルノコシカケ科のマツホドの菌核をそのまま乾燥したものです。味は辛く、寒熱は平で、脾を益し、心を養い、水を利し、湿を滲ずるとされます。つまり、胃腸を丈夫にし、精神を安定させ、水分代謝を調節する薬として、古来用いられています。牡丹皮の味は辛くて苦く、微寒で、熱を散じて瘀血を改善する作用があります。(『古方薬議』には、「硬く固まった瘀血を除き、化膿した腫れ物を治し、月経を通じ、打撲損傷を消退させ、腰痛を治し、煩わしい熱感を除く」と記載されていて、)鎮静、鎮痛、駆瘀血剤として広く使用されてきました。桂枝は産地にもよりますが、シナモンやその同属植物のことで、実際はその皮である桂皮を使用することがほとんどです。(『薬徴』には、「主として、体の下から上のほうへ突き上げてくるような症状を治す」などと記載されていて、)気を引き下げ、健胃、発表、鎮痛作用を持っています。附子も補腎の剤として重要な役目を果たしています。附子は、キンポウゲ科トリカブトの子根です。アコニチンなどのアルカロイドを含み、利尿、強心、鎮痛作用があります。味は辛く、温める作用があるので、新陳代謝の低下した状態を回復させる力があります。毒性もあるため、熱処理により減毒したものを使用します。

以上の八つの生薬が組み合わさって腎を補う作用を発揮します。歴史的には逆になりますが、六味丸に桂枝と附子を足したものとも言えます。六味丸で腎陰を補い、桂枝、附子で腎陽を鼓舞することによって、陰陽が調和して正気が回復する処方になるわけです。

<古医書における記載の紹介>

北尾春甫の『当壯庵家方口解』には、「本方は命門の元陽を補う剤で、つまり腎中の陽虚を補うものである。命門の元陽を補うというのは、釜の下の薪を増すと意味である。

(中略)八味丸によって命門を補えば下焦の陽がしっかりする。胃気の本は元陽であるので、人参、白朮などで脾を補うよりも、命門の真陽を直接補うことによって脾胃を温め、食が進む。したがって、不食の病人が八味丸煎によって食が進むということもある。本方は下焦の虚冷の養生薬である。」などと記載されています。

香月牛山の『牛山方考』には、「仲景八味丸料は、腎間の火水がともに虚し、諸々の虚損、消渴、大・小便に異常のある病で虚に属するものを治す妙剤である。湯液としたり、鍊薬

としたり、蜜丸とするなど、証にしたがって用いる。丸は酒または白湯で下し、急症には煎湯を用い、緩症（つまり緩やかな症状）には鍊薬にして用いる。薬が胸に泥むものには丸薬を姜湯（つまり生姜湯）で服ませる。」などと記載されています。

浅井貞庵の『方彙口訣』には、「八味丸は、腎気の虚寒から痰が逆上するものに用い、六味地黄丸よりは陽虚の甚だしいものに用いる。八味丸は腎虚による喘に用いる。八味丸は命門の火力が衰え、脾胃が冷えることからくる泄瀉に用いる。本方で下の火力が増すようにするもので、脾胃の陽は命門の火さえ焚えればよく、その火の衰えたものに用いるのである。八味丸料は腎虚からくる逆上で眩暈（暈）するものに用いる。」などと記載されています。

浅田宗伯の『勿誤薬室方函口訣』には、「八味丸料はもっぱら下焦を治す。『金匱』のいう小原不仁、あるいは小便不利、あるいは転胞に運用する。また虚腫あるいは虚勞、腰痛などに用いても効があり、特に消渴はこの方に限り、張仲景が漢武帝の消渴を治したという話もうなずける。」などと記載されています。